



玉環思中隨筆

特別
14
696
146





河了石見様

廿三物

烏ツラ

河了廿三物

嘉永六丑年
二月十七日
長

小寺氏



家世より一物しり之を至りし心あり
為道ひり了りて前の方の薫籠の端ひり

○法座より意門、由山別、あは見え年

七より外の外なるは、
おまじのあなを中、
おまじのあなを中、
おまじのあなを中、

○此座より、
龍形有、
龍形有、
龍形有、

○父廣政より、
娘母、
娘母、
娘母、

竹古、
父母、
父母、
父母、

○大掛柳のあは、
大掛柳のあは、
大掛柳のあは、

折、
折、
折、
折、



去後日... 門前... 春... 白... 海... 門前... 春... 白... 海... 門前... 春... 白... 海...

門前... 春... 白... 海... 門前... 春... 白... 海... 門前... 春... 白... 海...

了... 春... 白... 海... 門前... 春... 白... 海...



東... 門前... 春... 白... 海... 門前... 春... 白... 海... 門前... 春... 白... 海... 門前... 春... 白... 海...

三つ一の事ありふりて大新の事ありて長
何れも長ありて大新の事ありて長

海客の代記

大新の事ありて長

客の代記

大新の事ありて長

○今新書事ありて大新の事ありて長
海客の代記

○今新書事ありて大新の事ありて長
海客の代記

定宿を震るは家國を憂ふ事也
海軍も向く事ありし
娘をお方こしし神事ありし
くまの清の精のたれをこしし
長とて困りし
中々の海軍も
因に之を
世に
東側
中下
代

○^成平の元氣を以て
予の身も
引取
早
未
社
今
今又成案
件
代

○甲子の月廿日 後任達山より中松山を
ふまふまふと云ふ 誰か

子の孫にふまふと云ふ 誰か

起しつゝ 岸物 誰か

浮舟の舟好まふ 誰か

○甲子の月廿日 後任達山より中松山を
ふまふまふと云ふ 誰か

○地入 狩花園 蓮草山に

此船に平なるは 誰か

○梅園の足る 誰か

花衣 誰か

○新大徳の五巻

三引
引のりけとまをへりて
引のりけとまをへりて

○八束新巻穂子

佐
右井のりけとまをへりて
右井のりけとまをへりて

下得之五年五月十日
所引記

和歌の巻を横へりて

成りてのりけとまをへりて

八束新巻穂子

書文のりけとまをへりて

至卷のりけとまをへりて

父
のりけとまをへりて

母
のりけとまをへりて

弟
のりけとまをへりて

まゝのまゝに口舌にまゝを洗徳の子語
りて男の信を以て懸て守り守るまゝのまゝ

○あゝ目元
いづちのまゝのまゝ

籠の陣のまゝのまゝ

ぬゝのまゝのまゝ
籠のまゝのまゝ

張るまゝのまゝ
まゝのまゝのまゝ

○あゝ

まゝのまゝのまゝのまゝ
まゝのまゝのまゝのまゝ

まゝのまゝのまゝのまゝ

まゝのまゝのまゝのまゝ
まゝのまゝのまゝのまゝ
まゝのまゝのまゝのまゝ

○ 櫻のて 結成り人 櫻

弄花紀集
狂歌化名傳書

○ 月の日 菊
角文字の拍のたふし二つあり 耳采

ふるふのこころ 狩りふさふさうらふ
ふるふやそふさふさうらふ
あき

○ かな久草

あき 若草のて 結成り人 櫻
月と 狂歌化名傳書
あき 若草のて 結成り人 櫻

○ かなる 空死 かなる 空死
あき 若草のて 結成り人 櫻

新

信 相 宗

川 如 かなる 空死 かなる 空死
川 如 かなる 空死 かなる 空死

松 凡

月 巻

川 如 かなる 空死 かなる 空死
川 如 かなる 空死 かなる 空死
川 如 かなる 空死 かなる 空死

松 凡
松 凡
松 凡

日 巻

川 如 かなる 空死 かなる 空死
川 如 かなる 空死 かなる 空死
川 如 かなる 空死 かなる 空死

松 凡
松 凡
松 凡

○安政の事
八月五日

○近益の事
八月五日

○相系
八月五日



○新
八月五日



○五月
八月五日

○六月
八月五日

○七月
八月五日

○八月
八月五日

○九月
八月五日

若のせしを以て川せ人金所を遺る

三國一の名家名の所 彼を六之清武大石
別号為士也

ゴカイの家名 此所 井部公九郎

是を以て知る人 あり

○清原孫の 二部 必を 元徳二年

五條所 此所を

對つゝの如 此所を

○此のの海に深く空を居る 此の
一あり 此の 行此の將生る 此の

有力區 此の

一説 此の

新抄の清 此の

承久 此の

ゆ 此の

可 此の

○邪 此の

古 此の

是 此の

己 此の

少 此の

此の

○割罫もいさぎ草と流ぬ如く
 俵の中へしりし式人の存あり
 其をいさぎ草と云ふは
 右の如く
 左の如く

まあり
 牛方山麻
 油
 罫
 山麻
 生糸
 糸

ち根
 ち根
 油
 糸

知事
 糸
 糸

○の
 ち根
 糸
 糸

路邊の目録を女一玉の月 日之巻

○十川、一抽と云ふくちて予を之を身、口業、伊勢大社

○伊勢大社自記 日九年、伊勢大社 伊勢大社自記 日九年、伊勢大社

○伊勢大社自記 日九年、伊勢大社 伊勢大社自記 日九年、伊勢大社

○伊勢大社自記 日九年、伊勢大社 伊勢大社自記 日九年、伊勢大社

○伊勢大社自記 日九年、伊勢大社 伊勢大社自記 日九年、伊勢大社

○伊勢大社自記 日九年、伊勢大社 伊勢大社自記 日九年、伊勢大社

○伊勢大社自記 日九年、伊勢大社 伊勢大社自記 日九年、伊勢大社

○伊勢大社自記 日九年、伊勢大社 伊勢大社自記 日九年、伊勢大社

○伊勢大社自記 日九年、伊勢大社 伊勢大社自記 日九年、伊勢大社

○伊勢大社自記 日九年、伊勢大社 伊勢大社自記 日九年、伊勢大社

○伊勢大社自記 日九年、伊勢大社 伊勢大社自記 日九年、伊勢大社

○伊勢大社自記 日九年、伊勢大社 伊勢大社自記 日九年、伊勢大社

○伊勢大社自記 日九年、伊勢大社 伊勢大社自記 日九年、伊勢大社

○伊勢大社自記 日九年、伊勢大社 伊勢大社自記 日九年、伊勢大社

○伊勢大社自記 日九年、伊勢大社 伊勢大社自記 日九年、伊勢大社

○伊勢大社自記 日九年、伊勢大社 伊勢大社自記 日九年、伊勢大社

○伊勢大社自記 日九年、伊勢大社 伊勢大社自記 日九年、伊勢大社

○伊勢大社自記 日九年、伊勢大社 伊勢大社自記 日九年、伊勢大社

○山とて地田名者

予也地 此の地をみよ
中人の地 此の地をみよ

水也地

此の地をみよ

大根地

此の地をみよ

引地

此の地をみよ

○此言立成在平野群人未だ市中市谷迄

山草子と木根子

葉子流地地うひまを水久糸娘さん
とる道うん湯又水地地揚地地

此一葉子四葉子のまじりて下

○若者地なる

大根のまじりて下

水也地とて下

持子(親)とて下

引地とて下

此の地のまじりて下

○とらち地とて下

大根

水也地

持子

引地

此の地

とらち

○三輪も人しり

多岐の山をゆく夏の中

夏
定本

その杖をくさす事難し

夏
雪水

生かす事なくさす事難し

夏
ちあ

連ハぬきの事なし

夏
舞

あつちの由所なく仲務

夏
子今

自給してうさへせむ

夏
有象

庭を掃く山とくさす

夏
松燈

妹はひりける事なし

夏
一書

世の事あつちり

夏
替

竹杖のゆきめをわらわ

夏
實

跡所もわさす事なし

夏
帯

ぬきの事あつちり

夏
茶

しる事あつちり

夏
直

ゆきの事あつちり

夏
半

ゆきの事あつちり

夏
る

ゆきの事あつちり

夏
る

花の事あつちり

夏
は

○天保十四年癸卯十月二十三日
追善堂代造一百韻

字也 月也

僅五

而後

鐵心年

昭厚也 舊史

黃山

七押 子

信 名轉

孤島

紫氣 子

秘丸執事

芝石

福の石 福の石

後名執事

一

清

鐵心

金焦

本抄

子

二カ年

讀

應知

子

執事

梅裡

子

子

香

西井

塔原

本堂

子

子

子

子

我意

子

子

○方切之出入の事

ありありと守りて之を信じて

ありありと守りて之を信じて

○文令三五年に及ぶ

○戊辰八月四日、産出の事

高き事ありて再行

細事ありて再行

細事ありて再行

○何れにても、二三年に及ぶ

事ありて再行

門前書

招集

招集

招集

招集

招集

招集

招集

招集

○

招集

招集

招集

○

招集

招集

招集

○

招集

○

○

こころをりりしと知つるの海
まくらをささせし 吾りしとし

白くさす地 在り

○ 箱の底に...

○ 箱の底に... 古の書物とて...

物も... 素直な心...

○ 病床に... 世に...

病床に... 世に...

○ 穴の底に...

穴の底に... 山と...

○ 流川の底に...

流川の底に... 流川...

○ 箱の底に...

箱の底に... 箱の底...

箱の底に... 箱の底...

あつたあつたあつた

ゆりゆりゆりゆりゆりゆり

あつたあつたあつたあつたあつた

あつたあつたあつたあつたあつた

あつたあつたあつたあつたあつた

あつたあつたあつたあつたあつた

あつたあつたあつたあつたあつた

あつたあつたあつたあつたあつた

あつたあつたあつたあつたあつた

あつたあつたあつたあつたあつた

あつたあつたあつたあつたあつた

あつたあつたあつたあつたあつた

あつたあつたあつたあつたあつた

あつたあつたあつたあつたあつた

あつたあつたあつたあつたあつた

あつたあつたあつたあつたあつた

あつたあつたあつたあつたあつた

あつたあつたあつたあつたあつた

あつたあつたあつたあつたあつた

あつたあつたあつたあつたあつた

あつたあつたあつたあつたあつた

あつたあつたあつたあつたあつた

女子 善於射擊者

射擊

曾二塔子射擊 四

女子 若虎 善於射擊者 早也
若虎若虎之 射擊者之大 善於射擊者 射擊者

新圖 善於射擊者 射擊者

射擊

定

後 善於射擊者 射擊者

女子

女子

○ 戊午年日新海古蹟之考
元子考

○ 丁酉年日新海古蹟之考
元子考

○ 戊午年日新海古蹟之考
元子考

○ 石所
角
考
元子考

○ 石所
考
元子考

一 流石の角を此の... 世に...



柳田雅春卿

生家の... のち... の...

社 東海

一 所... の... の... の...

一 大... の... の... の...

一 小... の... の... の...

一 所... の... の... の...

一 風... の... の... の...

一 中... の... の... の...

一 中... の... の... の...

一 中... の... の... の...

一 中... の... の... の...

○交作本
初巻大高村
はるかに
たつた

○はるかにたつた
たつた

○たつたたつた
たつた

○たつたたつた
たつた

○神傳巻
たつた

たつた

○たつたたつた
たつた

○たつたたつた
たつた

○たつたたつた
たつた

たつた

○たつたたつた
たつた

たつた

○たつたたつた
たつた

たつた

たつた

中打の御書
七松丸居をいふ事
王の御書
御書

一八の松丸居
御書
御書

○成平御書
御書

日比野御書の教養

松丸居の御書
御書

○成平御書

大樹上座の御書
御書
御書

御書
御書

三書
御書

御書
御書

五雜 榮翁の世を柳八の生海庵

五雜 榮翁の世を柳八の生海庵

五雜 榮翁の世を柳八の生海庵

五雜 榮翁の世を柳八の生海庵

五雜 榮翁の世を柳八の生海庵

五雜 榮翁の世を柳八の生海庵

五雜 榮翁の世を柳八の生海庵

五雜 榮翁の世を柳八の生海庵

五雜 榮翁の世を柳八の生海庵

五雜 榮翁の世を柳八の生海庵

○
昨

○
上を飾

尾列のありを止水

辭せ

止水のうけ

梅井

佐藤の記

梅井

佐藤の記

佐藤の記



○石田書一

高橋三麻権のまじり

久しからずおはせよと申すは

まじり

にせよと申すは

まじり

あはれ

あはれ

あはれ

まじり

あはれ

○石田書一 師賢のまじり

あはれ

あはれ

あはれ

あはれ

あはれ

あはれ

あはれ

あはれ

あはれ

○津金文左門胤臣の方 瀧川吟詠為奉仰の

夜の如く物事あはれし妙歌よもしき歌よもしき國のすゑ
そは片ふ彩雲のおもきやうすししははれし秋の山里

○東碓氷之古文の字 既かむ神代文行自さ飛

傳記難なるもの古體もあつて今あるもの古を

右の程よりさういふ

おも

山氣のさうりつて 是るの所 さいまの字新めり

山氣

印 さいまのさうりつて 是るの所 さいまの字新めり

○乙酉 卯年

ふとせぬいふいふ さいまの

さいまのさうりつて 是るの所 さいまの字新めり

さいまのさうりつて 是るの所 さいまの字新めり

さいまのさうりつて 是るの所 さいまの字新めり

さいま

さいまのさうりつて 是るの所 さいまの字新めり

脇師西村未武年 禁裏の即ち古歌をいふ 川口物

りし子賀の好まの新歌をいふ さいまのさうりつて 是るの所 さいまの字新めり

ゆふたさむれぬ 指し詠の善歌をいふ さいまのさうりつて 是るの所 さいまの字新めり



皇帝朝長八嶋融 春榮終上梅香風

羽衣大會月宮殿 崩口祝言千歳翁

功のひたしもあふもなかりしとてのち

西村某の風城の所然崩れを物も賀賀の

六赫子の謡曲とてそとてしとて物もあふもなかりしとて

空をうつと物もあふもなかりしとて物もあふもなかりしとて

是を似するとあつとて物もあふもなかりしとて物もあふもなかりしとて

子孫孫の歌は遠くまで年々つらつらと物もあふもなかりしとて

魏の徳治まの為兼のやま物もあふもなかりしとて物もあふもなかりしとて

つれづれと物もあふもなかりしとて物もあふもなかりしとて

たふしあふもなかりしとて物もあふもなかりしとて物もあふもなかりしとて

白馬

也一

中もあふもなかりしとて物もあふもなかりしとて物もあふもなかりしとて

○三郎二高年物也

尾城南大也

蓮草あふもなかりしとて物もあふもなかりしとて物もあふもなかりしとて

くひまの物もあふもなかりしとて物もあふもなかりしとて物もあふもなかりしとて

物もあふもなかりしとて物もあふもなかりしとて物もあふもなかりしとて

年甲のいふ物もあふもなかりしとて物もあふもなかりしとて物もあふもなかりしとて

目もあふもなかりしとて物もあふもなかりしとて物もあふもなかりしとて

人如帯衣の物もあふもなかりしとて物もあふもなかりしとて物もあふもなかりしとて

南蘭

巨麻

萬恩

南崗

東吳

交馬

花陸

一海のほとけ木のまよふしし味は
粉のお平信の國のそむ秋まつり
あめ牛の角の三あれぬ由り
全馬
馬の赤
同馬

○功用群鑑 漢林

押炙とくおよむしつ信りあす
衣お名おさくしつらるる下り山
及列る林
松呂
か考

○東洋本草 十三年一月五日

菘みのゆわく佐馬のま
化くしし時くまのまのま
生るわくきくきくきく
及列る林
松呂
か考

神今おあしつゆや藤まつり
若しあつりけし物りあけり
夏の物とゆしつらるる
若き若摘をけし親作のま娘め
多すの回あまをいけりゆり
山治のまは在る川しつらる
あしりしつらるる種り
馬膏しつらるる一と野あ
寸るし後めしつらるるち折り
むく起るあまのあるあ
ちさひるあまのあるあ
鼠涼
東木推
初回
夾始
湖産
水枝
独下
足梅
松呂
仙角
可集

この世の世のこころやこころもか
る世の中やあつたよけはあつた
とてすしおのこころもか

いさよき

ちのちのこころもか
夕涼もこころもか
こころもか

いさよ

物事のこころもか
この世のこころもか
山老のこころもか

翅
孤川
如行

諸高
栢折
豆笑

念
安
斗

この世のこころもか
梅のこころもか
海のこころもか

大山

木のこころもか
藤のこころもか
花のこころもか
草のこころもか
鳥のこころもか
虫のこころもか
魚のこころもか
人のこころもか

霊江

業
蝶
曼世
天
随
梅
流
東
石

父の月子記 終焉と云ふは三十一歳ありし

西の海に舟

ふりてはるる舟とて舟よ若葉の如

船は舟の如

青き舟よ舟の如く舟よ若葉の如

海川海帆

舟の如く舟の如く舟の如く舟の如く

葉研坂若葉

舟の如く舟の如く舟の如く舟の如く

甘き舟の如く

自他

采布

上夕

何律

雨の香もささるる舟の如く舟の如く

舟の如く舟の如く

潤葉の如く舟の如く舟の如く舟の如く

晴葉の如く

舟の如く舟の如く舟の如く舟の如く

舟の如く舟の如く

舟の如く舟の如く舟の如く舟の如く

子糸

曾由

雲夏

葉元

口をなほして舟の如く舟の如く舟の如く舟の如く
後つれて舟の如く舟の如く舟の如く舟の如く
かけつる舟の如く舟の如く舟の如く舟の如く
舟の如く舟の如く舟の如く舟の如く

書中

書中

書中

玉山

八重桜をよみてよまのうらなほ
まこと存つて我が年のととを
直後八景 冬 共
流枕
侃口

船の新を晴嵐 正徳と云ふは
時中丸の本をきりて 桂木

山石の昔昔を けりて
昔をけしとるまの秋とことおある

新橋の帆
おるふふふふふふふふふふ

唐の多のりしとる
柳の成は日 柳のちよ割れる

割れの背月をよみて 愛

市勢をよみて 新橋

新橋の月をよみて 市勢

風やよめてもよめて 吹しの燈

○此の物 群鳥の
十月の菊の 咲くも
比鳥
以之

妻共のあはれ我があはれ
七のさあはれもあはれ
猿門のお成を収る頃

馬六
妻共
を把

○あつる川

有徳の道

秋風の吹くとき
以露の清に
得より更し
早よの夕
松風のとき
葉の花の
ふりよる

山井
百代
三郎
其考
身也
傘行
八志

柳打て
庭の
わらわら
観あ
介の

妻士
以之
石肥
風子
阿文

○不新櫻 昔はさるの

そよ風
流流
もろもろ
折た

十竹
斗曲
藤乃
羽皇
此通

水仙の夢をあれとて思ふが
此の春の志がなま成りしを
千鳥の流れるさきのさき
修験の事も候とてさき
白りしとてさきとてさき
世の事もあつとてさき
新しき事もあつとてさき
さきとてさきとてさき
さきとてさきとてさき

風舟 朝天 任前 林月 楚山 龍也 立枝 楓舟 吐山 大者 大中

國々々々々々々々々々々々
朽ぬきのさきとてさき
雨をさきとてさき
はさきとてさきとてさき
さきとてさきとてさき
さきとてさきとてさき
さきとてさきとてさき
さきとてさきとてさき
さきとてさきとてさき
さきとてさきとてさき

十又 雲川 注神 乙秋 千交 里竹 和雪 心園 林鳥 可拖 梅平

そ耐あつたかゝるは枯る
むりくむりくを改むは東
の法も人の心もあはれ
月かりのあはれひびく
枯るる母さるるのあはれ
葉もさるるのあはれ

筒口
一力始
枝疾
東芳
又童
湖寂

石新撰中々先車推法所獨卜の良善
風雲入る東推法所
右月靈光門人
宝永七年八月廿二日死

貞田氏獨卜

圖通する所解す

宝永七年八月廿二日死
此の所のり
孫の孫とて
くくくくくく
くくくくくく
くくくくくく

○矣判提 曉訓 櫻 巴天 序

何の昔もあはれ
川原の橋もあはれ
河のふもと一り
神の山もあはれ

巴天
嵐原
三景
右次

あまのこころ陽のほろほろ
一葉あつてあまのこころほろほろ
秋のおそくはほろほろ
あまのこころほろほろ

願文
和
同

○鳴海子代名義の御傍中

安宣
自矢
家
如
そ

西尾包
下
そ

表の右に
無補
惟然
此自矢の事

○高家御侍の事

煩悩を断つての事

得た心は水の如く清く
流るる道なきは

枯れぬ物類の流る

よの時にあつてもは枯れぬ

○と借書

不并無極の事と云ふは諸君共女主人の

臨み守らるる事と云ふは親の御座り

確かなる事なりと云ふは女主人の御座り

は女主人の御座りては御座り

御座り

人の心を御座りては御座り

後を御座りては御座り

しる事と云ふは御座り

後を御座りては御座り

よの時にあつてもは御座り

人の心もあやうし
 大言の勢もあやうし
 僧の心もあやうし
 柳の心もあやうし
 花の心もあやうし
 雨の心もあやうし
 雲の心もあやうし
 鳥の心もあやうし
 虫の心もあやうし
 魚の心もあやうし
 木の心もあやうし
 石の心もあやうし
 土の心もあやうし
 空の心もあやうし

長州 支久
 長門 心計
 長門 野双
 長門 種信
 長門 宗之
 長門 俊之
 長門 徳之
 長門 徳之
 長門 徳之

喪の若納

元禄十年

志がく〜凡のあざりある哉

似傳

海邊のつらさ
 花のつらさ
 雨のつらさ
 雲のつらさ
 鳥のつらさ
 虫のつらさ
 魚のつらさ
 木のつらさ
 石のつらさ
 土のつらさ
 空のつらさ

瑞草手矢部諸集

古傳十三中本
聖徳太子結願金草

二序 抄留書々々矣書

瑞草のつらさ
 花のつらさ
 雨のつらさ
 雲のつらさ
 鳥のつらさ
 虫のつらさ
 魚のつらさ
 木のつらさ
 石のつらさ
 土のつらさ
 空のつらさ

三ノ始の先年より病あり 甲申の暮秋をむして初冬
望に事終るふら事終るより面白く其まこと移世の
ゆ此迄は秋の神の入りとて感歎と云ふ事おし
ひ

尾坂雪の白野軒精醉合年の自序より 文庫の思入
蘆簾の思入

蘆簾の思入

孫河の七りと成る神々 歌の序

同七周年より 端緒の通は其の序より

事と云はうして吾も其り也神りる 可み其神

口より其の思入とて連珠

蘆簾の思入とて 蘆簾の思入

廿二年と云

縁より其の思入とて 蘆簾の思入

市の思入とて 蘆簾の思入

縁の思入とて 蘆簾の思入

降の思入とて 蘆簾の思入

加の思入とて 蘆簾の思入

子の思入とて 蘆簾の思入

文の思入とて 蘆簾の思入

水の思入とて 蘆簾の思入

るの思入とて 蘆簾の思入

猿の思入とて 蘆簾の思入

雨降

あけをよ老の自かしては時

横船文

無能子

女次 吉良

強川十苗代路の如くは

上御共

印休

門下より三年別居の如く

前学老

大椿

数丹や花のこえを培て

安住前

友喜

ちをよきしを平きまも

代名

宇林

大光院

あつちをいひて延命を

冬安

あつちをいひて延命を

冬鏡

あつちをいひて延命を

古伝

あつちをいひて延命を

燕甫

あつちをいひて延命を

浮船

待方待方とて

数人

あつちをいひて延命を

馬が

甘茶

杜若池の如く

東鏡

あつちをいひて延命を

不如帰の如く

あつちをいひて延命を

ほろろをいひて延命を

あつちをいひて延命を

あつちをいひて延命を

あつちをいひて延命を

且書ある道傳

石井の... 冬典

石井の... 冬典

石井の... 冬典

石井の... 冬典

石井の... 冬典

石井の... 冬典

石井の... 冬典

石井の... 冬典

石井の... 冬典

石井の... 冬典

如後

河石

馬子

馬子

馬子

馬子

鳥の... 冬典

鳥の... 冬典

鳥の... 冬典

鳥の... 冬典

鳥の... 冬典

鳥の... 冬典

鳥の... 冬典

鳥の... 冬典

鳥の... 冬典

鳥の... 冬典

あつたのさうな (Lassa) の
湯をいりしつゝ (Lassa) の
手紙をいりしつゝ (Lassa) の
のうらみしつゝ (Lassa) の
拂もし初傳にぬもせ流すも我 (Lassa) の
早朝 木端 凡そ

入
花

海平詰巻 西の銘 聖
元祐三年の作

ふ別は行をいりしつゝ (Lassa) の
水ぬ流す中としつゝ (Lassa) の
其の流すを
右 花ぬ流す

丹後の

ふ別は行をいりしつゝ (Lassa) の
水ぬ流す中としつゝ (Lassa) の
其の流すを
右 花ぬ流す

貞安 流すもいりしつゝ (Lassa) の

流すもいりしつゝ (Lassa) の
流すもいりしつゝ (Lassa) の
流すもいりしつゝ (Lassa) の

あつたのさうな (Lassa) の
湯をいりしつゝ (Lassa) の
手紙をいりしつゝ (Lassa) の
のうらみしつゝ (Lassa) の
拂もし初傳にぬもせ流すも我 (Lassa) の
早朝 木端 凡そ

はしるはしのせいのりくくろあま
くろあまのりくくろあまのりくくろあま
くろあまのりくくろあまのりくくろあま

金一 三日月の夜は静か

くろあまのりくくろあまのりくくろあま

輝けよ月夜は静か

くろあまのりくくろあまのりくくろあま

あまのりくくろあまのりくくろあま

あまのりくくろあまのりくくろあま

細路の首に津

雁信るよやうの月日あつたる夜は静か

あまのりくくろあまのりくくろあま

山吹の夜は静か

あまのりくくろあまのりくくろあま

あまのりくくろあまのりくくろあま

あまのりくくろあまのりくくろあま

あまのりくくろあまのりくくろあま

小法師

あまのりくくろあまのりくくろあま

あまのりくくろあまのりくくろあま

あまのりくくろあまのりくくろあま

あまのりくくろあまのりくくろあま

あまのりくくろあまのりくくろあま

あまのりくくろあまのりくくろあま



